国語

●満点100点　●時間50分

一　次の各文の――をつけた漢字の読みがなを書け。

(1) 紅葉が山々を彩る。

(2) 渓谷にかかるつり橋を渡る。

(3) 絵画展に秀逸な作品が並ぶ。

(4) 激しい雨を伴った風が窓に吹きつける。

(5) 海外旅行のために、旅券の発行を申請する。

二　次の各文の――をつけたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

(1) 手袋をアんで、祖母に贈る。

(2) キンベンな仕事ぶりが認められる。

(3) 世界最高峰へのトウチョウを夢見る。

(4) 校舎の落成を祝ってシキテンが催される。

(5) 青い海にヨットの白い帆がハえて美しい。

三　次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（＊印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

こよみさんのたいやきは、おいしい。何度食べても、驚く。あまたあるたいやきの中で一番なのはいうまでもないとして、これまでに食べたおいしいものの中でも一、二を争うくらいおいしい。嚙んだときの外皮の硬さと内側のやわらかさの按配だとか、小豆の粒の残り具合だとか、餡の甘さというのか甘くなさというのか、そういう何もかもがちょうどいいのだ。ちょうどよすぎて、うれしくなってしまう。自分のために焼かれたのかと、じんとくる。

ひとくち齧ったお客さんが、ぱあっと笑顔になる瞬間がうれしくて、とこよみさんはいう。ありがとう、とその場で頭を下げるのだそうだ。(1)いやいや、お礼をいいたくなるのはお客のほうだ。お礼をいったり、誉めたり、人に話したりしたくなる。おいしさに力がある。それまで胸を占めていた負の感情が一瞬にして取り払われる。

腹が立つほどうまい、と表現した人もいる。その人は、興奮のあまり顔を真っ赤にして、どこの小豆を使っているのか、小麦粉はどこから取り寄せているのか、水は？　砂糖は？　と詰め寄ったそうだ。何も特別なものは使っていないというと訝しんで、ほかに何か混ぜているのかと勘繰ったという。

「あんまり食いさがるから店にあった小麦粉や砂糖の袋を見せた。」

「それで納得した？」

「ううん、首をひねってた。」とこよみさんは笑った。こよみさんは上等な材料を吟味してはいるけれど、普通に手に入る範囲でまかなっている。

「そうでないと手に入らなかったときに困るから。自分以外のものが原因でつくれないなんて嫌でしょう。いつでもどこでもつくれるっていうのが、あたしの腕。」

いつか特別な粉と小豆で作りたくなる日が来るのかもしれないけれど、その前に自分にできることはすべてやってみてからにしようと思っている、という。

「でも、同じところから買いつづけていても、そのときどきでだいぶ粉の質にばらつきがあるんだよね。この粉じゃまずいでしょ、って日もある。」

「そういう日はどうするの？」

(2)「腕によりをかけます。」

粉の性質を見きわめるのが一番大事だ。日によって機嫌みたいなものがある。そんなことをいう。朝、粉に触れれば、その特徴がわ

かるそうだ。あとは、季節やその日の天気も考えて水加減とこね方を変える。適当っていえば適当だね、とこよみさんは笑うが、その仕事ぶりにいい加減なところはひとつもない。

いつだったか五嶋みどりというバイオリニストのことを話してくれた。「神童から天才に育ったっていわれてる人が自分の練習法を話したんだけど。」とこよみさんは憧れるような口ぶりだ。「難しい＊パッセージは1小節ずつ取り出して、それを完璧に10回弾けるようになるまで繰り返して練習するんだって。完璧になったらまた次の1小節。パーフェクト10っていう、彼女のお母さんが考え出したやり方だそうだけど。押しも押されもせぬ人が今もそうやって練習してるのかと思うと胸が熱くなったよ。」

それから少し照れくさそうに「たいやきとじゃ比較にもならないけど。」といった。「今まで何百、何千と焼いてきて、完全に思い通りに焼き上げるのがどんなに難しいか身にしみてわかってるの。それで毎朝10匹、完璧に焼くことができたらお店を開けることにしてるんだ。お昼にも10匹、夕方にも10匹。」

「その完璧な10匹はどうするの。」

「完璧なんだから、お客さんが来たら売るよ。ちょうどよく来なければ、あたしが食べちゃう。」

リスボンの話も印象に残っている。仕事のときは凛々しいほどのこよみさんの顔が、小さな女の子のようにほころんだ。

「昔、リスを飼ってたんだ。」とこよみさんはいった。「リスボンっていうの。」

「え、リスボン?」

「そう、リスのリスボン。あたしがつけたの。いい名前だと思ってた。リスボンが地名だなんて知らなかったのよ。父も母も反対しなかった。兄だけは、変な名前、って笑ったかな。でもそれがポルトガルの首都だなんて誰も教えてくれなかった。リスボンはね、人なつっこくて、愛嬌があって、賢くて、みんなに可愛がられてた。だけど、誰よりもあたしのことが好きだったんだ。あたしが学校から帰ると必ず玄関のところまで出て待っててくれた。アパートの階段を上る音であたしがわかるらしいのね。」

こよみさんは得意そうに、くん、と鼻を鳴らした。

「部屋の中で放し飼いにしてたの?」

「うん、籠はあったけどね、鍵はかけてなかったから、自分で扉を開けて出てくるんだ。それで、疲れたらまた自分で扉を開けて籠に入って寝る。」

「へえ、頭がいいんだね。」

「夏休みに、兄とあたしが親戚の家に泊まりに行ったことがあるの。2泊か3泊だったのに、帰ってきたらリスボンが玄関であたしに飛びついてきて、」とこよみさんは、実際に飛びつくような手ぶりをした。(3)飛びついたのはこよみさんじゃなくてリスボンだったはずなのに。

「抱き上げようとしたら、あたしの胸を蹴って自分の籠に駆け戻って、もうどうしていいのかわからないって感じでクルクルクルクルすごい勢いで回し車を回したと思ったら、」と、前足でクルクル回し車を回すしぐさをしている。リスボンのことを話すと自然に体が動いてしまうらしかった。

「また扉を開けて飛び出してきて、あたしに、どこ行ってたんだこんなに長く! ってはっきりいったんだ。日本語喋ったような気がするなあ。あたしはそのとき、あたしにとってたったの3日間が、リスボンにとってはずっと長く感じられるんだってことがようくわかった。単に待ってたから長く感じるってことじゃない、人間とリスとじゃ時間の流れの速さが違うんだってことがわかったのよ。」

いきものにとっての時間の速度は脈拍数と相関関係にあるらしい。それをこよみさんが知っているのかどうか僕は知らない。少なくと

もその頃のこよみさんは知らなかったろうけれど。

「胡桃が大好きだった。特別な日のおやつにしかあげないんだけど。そうすると、わ！ってよろこんで、最初は大きくひとくち齧るの。ね、でもすぐにもったいなくなるらしくて、取っておこうとするの。なるべく人目につかないところに隠しておこうとして、籠を出て、あちこち場所を探すんだ。誰も見ていないのを確認して、もちろんあたしも見ていないふりをしていると、鴨居の端だとか、食器棚の裏だとか、そういうところに胡桃を隠して、何食わぬ顔で籠に戻る。」

「それで、隠したのはどうするの？」と僕が聞くと、

「それが、忘れちゃうみたいなのよね。」とこよみさんがいった。それから、「いや、リスボンは頭がよかったんだから、忘れるわけがないか。」と考えるふうにいった。「保存食のつもりだったのかもしれないな。」

野のリスも、冬に備えて木の実を土中に埋める。そして隠し場所を忘れる。掘り起こされなかった木の実から、春になって一斉に芽が吹き出す。(4)雪がそここに残る単色の林の土に、鮮やかな萌黄色が混じる。空気は凜と澄み、くぬぎの枝から溶けた雪がぽたぽたと絶え間なく落ちて、冬眠から覚めた動物たちが食べ物を探して走り出す。リスも、自分が埋めたどんぐりのことは忘れて、生まれたばかりのやわらかい双葉を飛び越す。ちょっと齧ってみたりもするだろうか。

「リスボンが死んだとき、すごく悲しかったけど、」とこよみさんがいった。「死んだ後で、部屋のあちこちから胡桃が出てきてまた泣けたなあ。リスボン、こんなとこに隠してたんだ、後で取り出して食べるつもりだったんだ、って。我慢して取っておかないで、食べられるときに食べちゃえばよかったんだ。」

何度も思い出した情景だろうに、こよみさんは目を潤ませてうつむいた。

（宮下奈都「静かな雨」による）

〔注〕パッセージ――楽曲の中の一区切り。

〔問1〕(1)いやいや、お礼をいいたくなるのはお客のほうだ。とあるが、「僕」がこのように思ったわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　たいやきを買うだけのことなのに、買った客に対してこよみさんがあまりにもていねいにお礼を言ってくれるから。

イ　こよみさんのたいやきを食べた客は、だれでもおいしさのあまりうれしくなって自然と明るい気持ちになると考えたから。

ウ　こよみさんは忙しいにもかかわらず、店にやってくる客の好みに応じて一つ一つ味を工夫したたいやきを焼いてくれるから。

エ　客が知りたいと思えば、こよみさんはたいやきの材料の一つ一つや詳しい作り方までだれにでも親切に教えてくれるから。

〔問2〕(2)「腕によりをかけます。」とあるが、この表現から読み取れるこよみさんの様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　十分に品質の高い材料がどうしても手に入らないときは、ありあわせのもので適当に作るしかないと屈託なく話している様子。

イ　自分の思ったとおりに焼けそうもないときには、客に出すためのたいやきは最初から作りはしないときっぱり言いきっている様子。

ウ　客が喜んでくれるたいやきを毎日作り続けるためには、材料選びに手抜きをしないことが不可欠だと力説している様子。

エ　材料が満足のいく状態でないときこそ最善を尽くすようにしているということを、少しおどけたような言い方をして話す様子。

〔問3〕 (3)飛びついたのはこよみさんじゃなくてリスボンだったはずなのに。とあるが、この表現から読み取れる「僕」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア リスになりきったように動作を交えて夢中になって話すこよみさんを見て、驚きながらもほほえましく思っている。

イ 楽しげなこよみさんを見て、自分もいっしょにリスの動作をまねしたくなるような気持ちの高まりを覚えている。

ウ 他人には分かるはずもないリスのことなのに、こよみさんがあまりにも熱心に話すので不思議に思っている。

エ リスの動作を見逃さずに細かく観察していたこよみさんの一面を見て意外に思い、違和感を覚えている。

〔問4〕 (4)雪がそこここに残る単色の林の土に、鮮やかな萌黄色（もえぎいろ）が混じる。空気は凛（りん）と澄（す）み、くぬぎの枝から溶けた雪がぽたぽたと絶え間なく落ちて、冬眠から覚めた動物たちが食べ物を探して走り出す。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 冬を越えて見る間に変わってゆく林の情景や片時もじっとしていない動物の様子を、時間の経過とともに説明的に表現している。

イ 早春の林の変化や動物たちの動きを細部までありのままにとらえ、自然の雄大な風景とともにていねいに表現している。

ウ 隠した木の実のありかを忘れて探し回る動物と芽を出してたくましく成長する植物とを対比して、ユーモラスに表現している。

エ 春を迎えて林が活気づく情景を、雪解けとともに動き始める動物や芽吹く植物を描きながら生き生きと印象的に表現している。

〔問5〕 この文章中でこよみさんの話している言葉の中から、こよみさんの考え方や感じ方がよく表れていると思う一文の初めの六字をそのまま抜き出して書き、その一文から読み取れる考え方や感じ方を三十五字以内でまとめて書け。なお、、や。もそれぞれ字数に数えよ。

ただし、「腕によりをかけます。」の一文は使用しないものとする。

四

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

コミュニケーションを行っている他人が、今何を考えているのか、何に注目しているのか、何を知っていて何を知らないのか。認知環境と呼ばれるこれら他者の心の世界を、いかに意図的に変化させるのか。それこそがコミュニケーションなのである。(1)この考え方は、言葉で「意味」を伝達することがコミュニケーションである、という考え方と真っ向から対立する。（第一段）

次の二つの事例を考えてみよう。ここではごく短い会話において、「推論」がいかに重要な働きをしているかが説明される。*スペルベルと*ウィルソンの本に書かれている事例である。

(2)事例1　A「コーヒー、いる?」
　　　　　B「コーヒーは目がさえるなあ。」

事例2　A「今日は何をするつもり?」
　　　　B「ひどく頭が痛いの。」（第二段）

事例1のBの発話が意味するところは何だろうか? もちろん、「コーヒーは目がさえる」という事実のみを、Aに伝えたかったわけではないだろう。もしBが、今から眠ろうとしているのであれば、「コーヒー、いらない」という意味であろうし、徹夜か何かで仕事をしようとしている状況であれば、「コーヒー、いただきます」という意味である。このように、ある発言が、言葉どおりの意味では

なく、コミュニケーション場面において実際にどのような役割、働き、意味、をもつかの考察を、言語行為論という。発言を一つの行為とみなし、それが何を要求した行為なのか、などを考えていこうとするアプローチのことである。この言語行為論の考え方からすれば、一見あいまいに見える事例1のBの発言も、前後の文脈や状況がはっきりとしていれば、その意味は「コーヒーをもらう」という行為、あるいは「コーヒーを拒否する」という行為ということになる。（第三段）

では事例2はどうであろうか。Bは「ひどく頭が痛いの。」という発話によって、どのような命題をAに伝えようとしているのだろうか。あるいは、言語行為論的に考えてみれば、事例2において、BはAに、どのような行為をとらせようとこの発言を行ったのであろうか。考えてみれば、事例2は不思議なコミュニケーションである。「今日は何をするつもりなのか」という質問に対し、今日行うことについて答えるのでもなく、また何も行わないと答えるでもなく、なぜか「頭が痛い」という事実を相手に伝える。それはどういう意味なのか。発言の意味をはっきりと一つだけ選べ、ということであれば、その意味は「何もしたくはないということ」と答えるべきなのかもしれない。あるいは「頭は痛いけれども、頑張る」ということかもしれない。しかし事例2は、たとえ文脈や状況が明確になろうとも、明らかに事例1よりは、伝えようとしていることがはっきりと一つには定まりにくい。（第四段）

事例1の意味がはっきりとしやすいのに対し、事例2は、なんとなくどのようなメッセージを伝えようとしているのかがはっきりしない。では、事例2は、事例1よりも、「あいまいな」コミュニケーションなのだろうか。（第五段）

(3)決してそうではない。何よりも重要なことは、事例2のBの発話が、明確な意図、意志をもって発言されているという点だ。Bは、明確な意図のもと、何かを伝えようとしている。ただ、それは一つの命令や文章として、表現しにくいものというだけなのである。では何が伝わったと考えればよいのだろうか？　事例2は、どのようなコミュニケーションと考えるべきなのだろうか。（第六段）

あえて言うならば、事例2のBは、相手にとって意味がある情報を意図的に提供することで、相手の認知環境を変化させることをねらったのである。「ひどく頭が痛い」という情報を知る前のAの頭では、まさかBの体調が悪いなどとは思いもよらないことかもしれない。「何をするつもり?」と質問したAの頭にあるのは、今日の曜日、天気、などを考慮し、今日行うことができることのリストであったかもしれない。答えとして返ってくる可能性の高いもの低いものなど、さまざまな想定が、Aの頭には浮かんでいるし、Bもまた、そうしたさまざまな想定をAが浮かべていることだろうと、考えている。（第七段）

ところで、今、Bにしてみれば、とても今日何かするどころではない。なぜなら、頭が痛くて、とても予定を立てるなど考えられないからだ。おそらく、Aは、頭が痛くて私が大変な思いをしている、などとは考えもしないだろう。つまり、Aの認知環境には、「Bは頭が痛い」という想定は、ほとんどゼロに近い確率の存在である。ならば、何よりまず、その情報をAに提示し、Aの認知環境を変化させる必要がある。（第八段）

事例1は、確かに想定が一つに定まりやすいコミュニケーションである。そのやりとりの結果が、「コーヒーをもらう／もらわない」という行動に直結したコミュニケーションであるといえる。それに対し、事例2は、やりとりの結果、AやBの行動を制約するような明確なメッセージは存在しない。そもそもBは、「ひどく頭が痛い」と言うことによって、Aに何をしてほしいのかがはっきりしない。しかし大事なことは、事例2のBの発話により、Aの認知環境が劇

的に変化している、という点だ。その劇的な変化は、Aに特定の行動を強いるようなものではないのかもしれない。しかし、Aは、Bの発話を聞くまでは、考えもしなかったことを、考えるようになったのである。これをコミュニケーションといわずして何というべきだろうか。（第九段）

認知環境の変化が大きいほど、そしてその変化がより意図的に計画されたものであるほど、そのやりとりはコミュニケーションらしいコミュニケーションとなる。変化を引き起こすには、言葉を用いようが、単なる動作であろうが、特に重要な違いはない。逆にいえば、言葉を用いていても、なんら相手の認知環境を変化させず、意図的ではなく、自動的で無意識的なやりとりは、コミュニケーションらしくないコミュニケーションということになる。＊推論モデルの観点からいえば、言葉によろうが無言の行為によろうが、コミュニケーションとは、とにかく相手の認知環境を変化させる行為のことなのである。しかも、はっきりとした意図をもって。（第十段）

（金沢　創「他人の心を知るということ」による）

〔注〕 スペルベル――フランスの人類学者。
ウィルソン――イギリスの言語学者。
推論モデル――スペルベルとウィルソンが提唱した、推論に着目するコミュニケーションのとらえ方。

〔問1〕 (1)この考え方は、言葉で「意味」を伝達することがコミュニケーションである、という考え方と真っ向から対立する。とあるが、「この考え方」とはどういう考え方か。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア たとえ意見の対立があっても、相手に直接働きかけて意図を明確に伝え合うことがコミュニケーションであるという考え方。

イ 他者の心の世界を知ることはできなくても、いかに相手を思いやるかがコミュニケーションでは重要であるという考え方。

ウ 自分の思考や感情を、言葉を使って相手に分かりやすく伝えることがコミュニケーションの本質であるという考え方。

エ 相手に働きかけて、考えや認識や関心の対象を変えさせようとすることがコミュニケーションであるという考え方。

〔問2〕 (2)事例1　A「コーヒー、いる?」　B「コーヒーは目がさえるなあ。」とあるが、この事例を示すことで筆者が述べようとしたこととして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 一つ一つの言葉の意味から発言の役割や働きを考察していくことで、どのような場面なのかは分かるということ。

イ 事実を伝えるだけでなく、自分が何をしたいのかということを具体的に示して発言することが大切であるということ。

ウ あいまいに思える発言であっても、前後の状況が分かれば何を求める行為なのかが明らかになるということ。

エ 相手の状況を考えず、まずは発言を言葉どおりにとらえることが話をうまくかみ合わせる条件となるということ。

〔問3〕 (3)決してそうではない。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 事例2は、Aの問いかけに対してBが的確に答えていないという点では事例1とほとんど同じであると考えたから。

イ 事例2のBの発話は、相手の認知環境を変化させようという明らかな目的をもって行われたものであると考えたから。

ウ 事例2においても、自分が何をしてほしいかという情報がBの発話によって相手に正確に伝わっていると考えたから。

エ 事例2よりも、むしろ事例1の方が命令や文章として表現しにくい内容を伝えようとしていると考えたから。

〔問4〕 この文章の構成における第九段の役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた二つの事例の内容をまとめ、コミュニ

ケーションを認知環境の変化からとらえたこの文章全体の結論に導いている。

イ　それまでに述べてきた現代のコミュニケーションの問題点を踏まえ、正確な情報を伝達することの大切さを強調して結論を補足している。

ウ　それまでに述べてきた二つの事例に加え、現代のコミュニケーションに関する新たな具体例を列挙して論の内容を理解しやすくしている。

エ　それまでに述べてきたコミュニケーションのあり方を否定し、異なる観点から認知環境の重要性を示すことで論の展開を図っている。

〔問5〕　国語の授業でこの文章を読んだ後、「相手に働きかけるコミュニケーション」というテーマで各自が身近な体験を交えて意見を発表することとする。このとき、あなたが話す言葉を二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、、や。や「なども、それぞれ字数に数えよ。

五　次のA及びBは、それぞれ「奥の細道」に関する座談会と講演の記録の一部であり、あとの[ ]内の文章は、A及びBで述べられている「壺の碑」について書かれた「奥の細道」の原文である。これらの文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印のついている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A

坂崎　ふと思ったんですけど、『奥の細道』は、その一巻が壮大な交響曲の体をなしていますよね。僕が天才音楽家だったら、『奥の細道』で一大シンフォニーをつくっているなあ。

嵐山　司馬遼太郎さんも「芭蕉にはわれわれ千人がかかってもかなわない。」って言っています。

関　ありがたいと思うのは、今でも『奥の細道』が日本中の実際にある風景に物語を与えているわけでしょ。こういう文学、日本以外にはそうありません。

坂崎　そうですねえ。そういえばゲーテの『イタリア紀行』とかは非常に有名ですけれど、こんなにポイントがたくさんあるっていう具合にはなってないでしょう。

嵐山　『奥の細道』紀行はずっと残っていくわけです。みんなこれをたどって「ああ、昔はこうだったのだな。」というように感慨を新たにする。(1)芭蕉も同じことをしていて、*壺の碑を訪れて、すごく感激するんですよ。

関　碑に刻まれた古人の言葉を目の前にしたときですね。「此城、神亀元年、按察使鎮守符将軍大野朝臣東人之所里也。……」という。

嵐山　それを読んで芭蕉は「泪も落つるばかりなり。」と。(2)文字の力をかみしめて*不易流行の理想に進む。そして現代のわれわれも芭蕉の綴った『奥の細道』を手に旅をする。

関　今、出かけていって『奥の細道』の情景が実際に残っている所はほとんどないんです。でも史跡をたずねてから、その周りも歩いてみると、なかなかいい場所があるんですよ。たとえば日光へ行くと、近くにある含満ケ淵がなかなかいい所なんです。でも意外と知られてなくて、観光客もほとんどいない。それから飯坂でも町に入る手前の道とか、山の中にけっこういい道がありました。

嵐山　あやめが咲いていた輪王寺もよかったですね。

関　(3)「あやめ草足に結ばん草鞋の緒」ですね。あやめ草は端午の節句に軒に吊して魔除けにしたことから、足に結んで旅の無事を祈ったのだろうと。そこで坂崎さんの新説が出るんです。

坂崎　ブルージーンズの染料のインディゴブルー同様、紫のあ

やめ草の草鞋はマムシ除けになったのかなって。

嵐山　鋭い＊ディテイルに気付きました。実際に旅をしてみなければ、こういう発見はできない。遊行柳もそうでした。坂崎さんと僕とで長い間じっと柳を見ているうちにだんだん陽が落ちてきて、「柳ってやっぱり幽霊みたいだね。」とか語っているうちに、バーンと「あ、そうか。」ってわかった。「田一枚植えて立ち去る柳かな」は、柳が田を植えて立ち去ったという直訳的な句とみた方が素直なんですよ。(4)ひとつひとつの句の前に実際に立ってみることが大切なんです。ゆっくりと一時間でも二時間でもその前に立ってみることですね。

坂崎　当時のままではないにしても、その土地の〝気配〟みたいなものは、そう簡単には消えない。

嵐山　言葉の霊ですね。それが＊歌枕であり、＊俳枕なんですね。

（嵐山光三郎・坂崎重盛・関正和「奥の細道が呼んでいる」による）

B

私も多賀城の碑を見ましたけれど、そんなに大したことは書かれてはいません。

京都から千五百里だとか、常陸の国から四百里ほどだとか、べつに文学的な文章ではない。何か地理の教科書みたいな文章であります。

ところが『おくのほそ道』を読み返してごらんになると、その感動が皆さんに伝わってくると思うのですが、芭蕉は感激した。

芭蕉は、山や川は崩れると思っていたんですね。われわれは自然というものについて、つい永遠と思いがちですが、芭蕉というのは偉い人ですな。環境は破壊されるものだと思っている。たとえば大水が出る。崖崩れがある。そういうものをしょっちゅう見ていたんでしょう。山河というものは不変ではないと思っていた。山河も崩れる。ところが文章は不変だ、永遠のものだということを書いている。

つまり、その碑に彫られていたのは、初等地理の教科書のような、短い、内容のない、文学的内容の皆無の碑銘ですが、芭蕉にとっては貴重な文章だった。

その文章は、土の中に埋まっていた、千年前の文章である。千年前の文章を今、わが目で見た。

これほどの感動があるだろうかと。

文章は人が書いたものですから、われわれにとっては人工のものだと思いますが、芭蕉にしたら、文章こそ自然のものなのでしょう。人の言葉こそ、人の脳の中から、目を通したものから、耳を通したものから、感覚を通したものから出ているわけですから、人の言葉こそ自然のものである。山や川は崩れるが、文章は永遠だ。もう、こんな感激はないと書いているわけです。

（司馬遼太郎「『見る』という話」による）

壺碑　　市川村多賀城にあり。

つぼの石ぶみは、高さ六尺余、横三尺ばかりか。苔を＊穿ちて文字幽かなり。四維国界の数里を記す。「此城、神亀元年、按察使＊鎮守府将軍大野朝臣東人之所里也。天平宝字六年、参議東海東山節度使　同将軍恵美朝臣獦　修造而。十二月朔日」とあり。聖武皇帝の御時に当れり。昔より詠み置ける歌枕、多く語り伝ふといへども、山崩れ川流れて道あらたまり、石は埋れて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代変じてその跡たしかならぬ事のみを、ここに至りて疑ひなき千歳の記念、今眼前に古人の心を＊閲す。＊行脚の一徳、存命の悦び、＊羇旅の労を忘れて泪も落つるばかりなり。

（立松和平「すらすら読める奥の細道」による）

〔注〕壺の碑（つぼのいしぶみ）——奈良時代に築城された多賀城の跡にある碑石。
不易流行——変わることのない本質的なものと時代とともに変化する独創的なもの。
ディテイル——細部。詳細。
歌枕（うたまくら）、俳枕——和歌及び俳句によまれた名所。
穿（うが）ちて——掘って。
鎮守府（ちんじゅふ）——当時の朝廷が東北地方に置いた役所。Aの文章の「鎮守符（ちんじゅふ）」に同じ。
閲（けみ）す——あらため見る。
行脚（あんぎゃ）の一徳——あちらこちらを旅して得られた一つの恩恵。
羇旅（きりょ）の労——旅の苦労や疲れ。

〔問1〕(1)芭蕉も同じことをしていて、＊壺の碑を訪れて、すごく感激するんですよ。とあるが、壺の碑を見た芭蕉の心情について、次の①及び②の各問に答えよ。

① Bの文章中に、壺の碑を見たときの芭蕉の感動について述べている箇所がある。その感動について次の□内のようにまとめるとき、（　）に当てはまる最も適切な言葉をBの文章中からそのまま抜き出して書け。

> 土の中に埋まっていた、碑に彫られた（　　　）を、今、自分が見ているという感動。

② ┆┆内の壺の碑について書かれた原文中に、芭蕉が自らの感激を直接的に述べている一文がある。その一文の初めの五字をそのまま抜き出して書け。

〔問2〕(2)文字の力をかみしめて＊不易流行の理想に進む。とあるが、ここでいう「文字の力」ということについて、Bの文章中で司馬さんがどのように述べているかをまとめたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　文学的にはまったく価値がないものでも、時代の変化に影響されることのない簡潔な文章は人を感動させるということ。

イ　古い時代に書かれた文章は貴重な資料となって、今まで知られていなかった事実の解明に役立っているということ。

ウ　山や川など自然の環境は変わってしまうが、人の言葉から生まれた文章こそ自然のもので変わらず永遠に残っていくということ。

エ　文章は人間の感覚をとおした人工的なものであるが、山や川などの自然の姿をありのままに描くことはできるということ。

〔問3〕(3)「あやめ草足に結ばん草鞋（わらじ）の緒」ですね。という関さんの発言がこの座談会の中で果たしている役割を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　直前の嵐山さんの発言を受けて俳句を示し、『奥の細道』で描かれている情景に関する内容から個々の俳句へと話題を転換している。

イ　『奥の細道』の時代の習慣がよまれた俳句を示すことで現代人の生活に役立つ話を聞き出そうとし、次の発言をうながしている。

ウ　長い道のりを歩く『奥の細道』の旅の苦労をよんだ俳句を示すことで現代の旅の安易さを気付かせ、新たな問題を提起している。

エ　それまでの自分の発言を踏まえて『奥の細道』によまれた俳句を示し、当時の色づかいが話題の中心となるきっかけを作っている。

〔問4〕(4)ひとつひとつの句の前に実際に立ってみることが大切なんです。とあるが、嵐山さんがこのように述べたわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア　その場所でよまれた俳句を思い浮かべることで、目の前の風

景をより深まりのあるものとしてとらえられるようになると考えたから。

イ　俳句がよまれた場所を実際に訪れると、これまで気付かなかったことを新たに発見するような体験が味わえると考えたから。

ウ　短い言葉で表現される俳句を正しく理解するためには、よまれた場所で作者の心情を想像してみる必要があると考えたから。

エ　俳句の新しい解釈を考えるためには、一字一字の内容を吟味して句そのものを時間をかけて鑑賞することが大切であると考えたから。

平成17年度 解答用紙 国語

（注）この解答用紙は編集上の都合により、実物を約70％に縮小してあります。142％の拡大コピーによりほぼ原寸大で使用する事ができます。

1

(1) 彩　　る

(2) 渓　　谷

(3) 秀　　逸

(4) 伴　っ　た

(5) 申　　請

2

(1) ア　ん　で

(2) キ　ン　ベ　ン

(3) ト　ウ　チ　ョ　ウ

(4) シ　キ　テ　ン

(5) ハ　え　て

3

〔問1〕

〔問2〕

〔問3〕

〔問4〕

〔問5〕 初めの六字

35

4

〔問1〕

〔問2〕

〔問3〕

〔問4〕

〔問5〕

25

100

200

5

〔問1〕 ①

② 初めの五字

〔問2〕

〔問3〕

〔問4〕

配点

1（計10点）					2（計10点）					3（計25点）					4（計30点）					5（計25点）				
(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	問1	問2	問3	問4	問5	問1	問2	問3	問4	問5	問1 ①	問1 ②	問2	問3	問4
2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	5点	10点	5点	5点	5点	5点	5点

国語

解答

一 (1) いろど (2) けいこく
(3) しゅういつ (4) ともな
(5) しんせい

二 (1) 編 (2) 勤勉 (3) 登頂 (4) 式典
(5) 映

三 〔問1〕 イ 〔問2〕 エ
〔問3〕 ア 〔問4〕 エ
〔問5〕 「自分以外のも」, (例)ひたむきに努力を重ねることで自分の納得のいく仕事をするという考え方。

四 〔問1〕 エ 〔問2〕 ウ
〔問3〕 イ 〔問4〕 ア
〔問5〕 〔省略〕

五 〔問1〕 ① 千年前の文章
② 行脚の一徳
〔問2〕 ウ 〔問3〕 ア
〔問4〕 イ

一〔漢字の読み〕

(1)音読みは「色彩」の「サイ」。 (2)谷間。 (3)他にぬきんでて，優れること。 (4)音読みは「同伴」の「ハン」。 (5)許可・認可などを願い出ること。

二〔漢字の書き取り〕

(1)音読みは「編集」の「ヘン」。 (2)仕事や勉学に休む暇なく，一生懸命励むこと。 (3)高い山の頂上に登ること。 (4)儀式のこと。 (5)音読みは「反映」の「エイ」。

三〔小説の読解〕出典；宮下奈都「静かな雨」(文學界2004年6月号)。

〔問1〕<文章内容の理解>こよみさんのたいやきは，とてもおいしい。あまりの味のよさにうれしくて，気持ちが明るくなるほどである。

〔問2〕<文章内容の理解>日によって，小麦粉の質がよくないときもある。そんなときこそ，水加減やこね方を工夫し，力を尽くしておいしい味を出すようにするのが，腕の見せどころなのである。

〔問3〕<心情の理解>こよみさんは，「リスボン」の話をしているうちに，こよみさんを待って飛びついて来た「リスボン」のしぐさを真似ていた。こよみさん自身が，「リスボン」の気持ちになりきっていたのである。

〔問4〕<文章内容の理解>春になって，林の木々が新芽を出す。暖かくなって，雪も解け始める。冬眠していた動物たちは，目を覚まし，食べ物を求めて動き回るのである。

〔問5〕<文章内容の理解>こよみさんは，たいやきを作るとき，特別な材料は使わない。「自分以外のものが原因で」おいしいたいやきができないのは嫌だと思う。普通の材料を使っているが，「いい加減なところはひとつも」なく，自分の腕で最大限のよい味を引き出すために，努力を重ねている。

四〔論説文の読解―社会学的分野―コミュニケーション〕出典；金沢創『他人の心を知るということ』。

≪本文の概要≫コミュニケーションとは，相手の心の世界を，意図的に変化させることである。発言の内容は，文字どおりにとられるものではない。前後の場面や状況において，相手が実際に何を要求している行為なのかという視点からアプローチするのが，言語行為論である。発話は，明確な意図をもち，相手の認知環境を変化させる。認知環境の変化が大きく，その変化が意図的に計画されたものであるほど，そのやりとりはコミュニケーションらしいコミュニケーションなのである。

〔問1〕<文脈の把握>コミュニケーションを行っている他人の心の状況，すなわち「認知環境」を，意図的に変化させることが，筆者の考えるコミュニケーションである。

〔問2〕<文章内容の理解>事例1のAの問いに対するBの答えは，一見あいまいに見える。しかし，Bが今から眠ろうとしている状況であれば，コーヒーはいらないという意味に理解できるし，Bが徹夜をしようとしている状況であれば，コーヒーが欲しいという意味に理解できる。このように，前後の文脈や状況がわかれば，相手の発言が「何を要求した行為なのか」ということが理解できる。

〔問3〕<文章内容の理解>事例2のB「ひどく頭が痛いの」という発話も，「相手の認知環境を変化させる」という明確な意図をもって，発言されたものである。

〔問4〕<段落関係の把握>事例1では，コミュニケーションの結果が，行動に直結する。事例2では，それが必ずしも行動に直結していないが，相手の認知環境を劇的に変化させている。二つの事例を踏まえて，コミュニケーションと

が糖に変わったことがわかる。

〔問２〕＜**だ液のはたらきと温度**＞温度を約37℃にした試験管①(結果１)では糖ができているのに，温度を約75℃や約０℃にした試験管③，④(結果２)では糖ができていない。この結果から，だ液中の酵素は約37℃でははたらくが，約75℃や約０℃でははたらかない，すなわち温度の影響を受けることがわかる。

〔問３〕＜**養分の吸収**＞デンプンは，だ液中の酵素(アミラーゼ)，すい液中の酵素，小腸の内壁の酵素のはたらきでブドウ糖にまで分解され，小腸の柔毛の毛細血管に吸収される。その後，血液中の血しょうに溶け込んで，肝臓へ運ばれ，そこから全身の細胞に送られる。細胞では，ブドウ糖などの養分から酸素を使ってエネルギーを取り出す。そのとき，二酸化炭素と水が生じる。なお，タンパク質を分解したときに生じる有害なアンモニアは，肝臓で無害な尿素につくり変えられ，じん臓から尿として排出される。また，小腸の柔毛のリンパ管に吸収されるのは，脂肪酸とグリセリンである。

5〔**身のまわりの現象や物質，化学変化と原子・分子・エネルギー**〕

〔問１〕＜**ガスバーナーの操作**＞図３のガスバーナーで，上のねじが空気調節ねじ，下のねじがガス調節ねじであり，Ｘがねじを開く方向，Ｙがねじを閉める方向である。まず，ガスバーナーに点火するときは，２つのねじが閉まっていることを確認してから，元栓を開く。次にマッチに火をつけ，ガス調節ねじを開きながら点火し，空気調節ねじを開いて適正な青色の炎にする。また，ガスバーナーの火を消すときは，空気調節ねじ，ガス調節ねじ，元栓の順に閉める。

〔問２〕＜**化合する物質の質量の割合**＞質量の増加分が，化合した酸素の質量である。結果１の表より，銅の質量が1.6gのとき，化合した酸素の質量は，2.0－1.6＝0.4(g)である。

〔問３〕＜**酸化銅の炭素による還元**＞石灰水を白くにごらせた気体は二酸化炭素(CO_2)で，そのモデルは○●○で表される。また，結果２でできた赤色の物質は銅だから，この化学変化は，酸化銅＋炭素 ⟶ 銅＋二酸化炭素($2CuO + C \longrightarrow 2Cu + CO_2$)と表すことができる。この化学変化では，酸化銅は炭素によって還元されて銅になり，炭素は酸化して二酸化炭素になっている。よって，炭素が受けた化学変化は，鉄くぎを空気中に放置したとき，鉄がおだやかに酸素と化合し，酸化鉄(さび)になる化学変化と同じである。一方，炭酸水素ナトリウムを加熱すると，炭酸ナトリウムと水と二酸化炭素に分解される。化合は２種類以上の物質が結びついて別の新しい物質ができる化学変化，分解は１種類の物質が２種類以上の別の物質に分かれる化学変化である。

6〔**電流とそのはたらき**〕

〔問１〕＜**結果の考察**＞磁界の中に置いたコイルに電流を流すと，電流が磁界から力を受けて，コイルが動く。よって，コイルの動いた向きは電流が受けた力の向き，コイルの動いた幅は電流が受ける力の大きさを表している。また，条件を変えたときにわかることを考察するときは，それ以外の条件がすべて同じ実験で比較する。ここで，表の６つの結果を，上から順にＡ～Ｆとする。電流の向きを変えたとき(イ)は，ＡとＢを比較することによって，電流が受ける力の向きが変わっていることがわかる。アでは，ＡとＤを比較することによって，電流の強さが変わることが読み取れる。これはエにも当てはまり，ＡとＤを比較することで電流が受ける力の大きさが変わることが読み取れる。ウのときは，ＢとＣを比較することで電流が受ける力の向きが変わることが読み取れる。

〔問２〕＜**抵抗と電流**＞オームの法則〔電流〕＝$\frac{〔電圧〕}{〔抵抗〕}$より，電圧が一定であれば，抵抗が小さいほど電流は大きくなる。よって，組み合わせてつくる全体の抵抗を小さくすればよい。電気抵抗を直列につなぐと，全体の抵抗の大きさは各抵抗の和となり，大きくなる。しかし，電気抵抗を並列につなぐと，全体の抵抗は各抵抗より小さくなる。よって，５Ωの抵抗を並列につなぐと，全体の抵抗は５Ωより小さくなる。

〔問３〕＜**電磁誘導**＞音の振動によって磁石が振動してコイルの中の磁界が変化したため，コイルに電流が流れ，エナメル線を伝わった電流がオシロスコープに波形として現れている。これは，発電機と同じしくみで，電流を取り出す装置になっている。また，このときコイルに電流が流れる現象を電磁誘導といい，流れる電流を誘導電流という。なお，この装置では，音エネルギーを電気エネルギーに変換したが，モーターやスピーカー，電球では，電気エネルギーを運動エネルギーや音エネルギー，光エネルギーに変換している。

は，相手の認知環境を意図的に変化させる行為である，という結論へ導いている。

〔問5〕<作文>相手の認知環境を意図的に，大きく変えることが，筆者の考えるコミュニケーションである。

五〔説明文の読解―芸術・文学・言語学的分野―文学〕出典；嵐山光三郎・坂崎重盛・関正和『奥の細道が呼んでいる』，司馬遼太郎『「見る」という話』，立松和平『すらすら読める奥の細道』。

≪現代語訳≫つぼの碑は，高さは六尺余り，横は三尺ほどであろうか。こけを掘るようにして読むと，文字がかすかに判読できる。四方の国境までの距離が書いてある。「この城は，神亀元年に，按察使鎮守府将軍大野朝臣東人が設営したものである。天平宝字六年，参議東海東山節度使同じく将軍恵美朝臣獦がさらにこれを整備完成した。十二月一日」という文がある。聖武天皇の御代にあたっている。昔から(多くの歌人が)詠んだ歌枕を，語り伝えている場所は多いが，山が崩れたり川の流れが変わったりして，道すじは昔と変わっており，石は地中に埋まり，木は枯れ若木に取って代わっているので，時代が移ると歌枕の跡も確かではないことばかりであるのに，ここに来て，疑いもなく千年前の遺跡を見，今目の前に古人の心をあらため見るような思いがする。(これこそ)あちらこちらを旅して得られた一つの恩恵であり，この世に生きる喜びであって，旅の苦労や疲れも忘れて，涙もこぼれんばかりの感動に浸った。

〔問1〕<古文の内容理解>①碑に彫られた何の変哲もない「千年前の文章」が，滅びることなく残っていることに，芭蕉は深く感動している。
②芭蕉は，あちこちを旅して得られる恩恵と，生き長らえて碑に彫られた千年前の文章を見た喜びに，旅の苦労や疲れも忘れ，涙が落ちるほど感激した。

〔問2〕<文章内容の理解>芭蕉は，山や川という自然は不変ではなく，崩れることを見抜いていた。しかし，人の目や耳を通して生まれた言葉，すなわち文章こそが，自然のものであって永遠のものである。

〔問3〕<文章内容の理解>『奥の細道』に出てくる情景の話から，芭蕉が実際にその地で詠んだ具体的な俳句を話題にしている。

〔問4〕<文章内容の理解>芭蕉が俳句を詠んだ地を実際に旅をしてみて初めて，一つ一つの句の細部や雰囲気がわかる。